

武蔵野大学仏教文化研究所紀要

第三十六号（二〇二〇年二月） 抜刷

# 南洋における大谷光瑞門下生の活動

——オランダ領東印度と小谷淡雲——

大澤 広嗣

## 南洋における大谷光瑞門下生の活動

——オランダ領東インドと小谷淡雲——

大澤 広嗣

〈キーワード〉浄土真宗本願寺派／インドネシア／バタビヤ（バタビア）、ジャカルタ／外務省／GHQ

### 一 序 論

#### （1） 本論の目的

真宗本願寺派（現・浄土真宗本願寺派）の第二代門主を務めた大谷光瑞（一八七六―一九四八）は、仏教界のみならず、実業界など多分野で活動する数多くの人材を育成した。同派寺院出身の小谷淡雲（一八九八―一九六五）<sup>1</sup>は、その一人である。

小谷は、光瑞の薫陶を受けて、光瑞が経営した南洋の農園での勤務を経て、外務省に入るのである。オランダ領東インド（略称・蘭印、現・インドネシア）のジャワ島にある首府バタビヤ（又はバタビア、現・ジャカルタ）の帝国総領事館で、副領事や領事代理を務め、日本とオランダの経済交渉をめぐる外交文書には、頻繁に氏名が登場するなど、昭和前期の両国間における外交関係において主要な役割を果たした。

小谷の活動範囲は、幅広い領域に関わるため、これまで実像が把握しにくかった。広範な知見を持った光瑞の弟子ゆえに、仏教界だけに収まらず、活動の場所を広げていったからである。

なお、論題にある「南洋」とは、厳密な地域の定義はないが、現在の台湾、東南アジア、大洋州に重なる地域を指す。明治以降に南洋各地には日本人が進出していき、第一次世界大戦の戦果により、ドイツ領であった南洋群島は国際連盟の委任統治領として日本が支配した頃から、南洋群島を「内南洋」、それ以外の地域を「外南洋」と呼称するようになった。本論では、小谷が各地を縦横に活動していたため、この地域概念を歴史用語として用いる。また当時の地名である *Batavia* について、外務省における地名表記の基準の一つであった「在外帝国領事館管轄区域」（明治四二年三月六日外務省令第一号）では、「バタビヤ」と記すので、本論ではこの表記に準じ、引用した原資料が「バタビア」の場合にはそれに従った。

## （2）先行研究について

本論で参照すべき先行研究は、大谷光瑞に関する成果である。既に多くの蓄積がなされてきたとはいえ、光瑞の周辺人脈の研究は、いまだに取り組むべき課題が多い。

近年における主な先行研究として、全体像に関する成果は白須淨眞と柴田幹夫の成果がある。<sup>③</sup> 個別問題の成果は、光瑞の活動に比例してまさに多岐にわたるが、本稿で参考となるのは、光瑞による門下生育成、南洋での農園事業に関する研究である。

門下生育成については、出身者の親睦組織「瑞門会」を論じた小出享一の研究がある。<sup>④</sup> 南洋各地の農園について加藤斗規の研究、光瑞が提唱した「熱帯農業」の技法を分析した玉井鉄宗の研究、台湾の農業について三谷真澄の研究、<sup>⑤</sup> 三谷・ヤマンラール水野美奈子・嵩満也によるトルコでの農業を中心とした諸事業に関する共

同研究がある。<sup>(8)</sup> これらの研究を踏まえて、本論では小谷の実像に迫りたい。

なぜ、仏教者である光瑞は、宗教活動以外に多方面で活動したのか。先行研究で柴田幹夫は、光瑞が一八九九（明治三二）年に清への視察に際して発言した「国家の前途と宗教の将来とに付て深く考ふる所あるに因る」に注目する。<sup>(9)</sup> 光瑞は、明治期から日本が進むべき方途を考えており、その思想が実践としてアジア各地での農園事業につながっていくのである。

日本とインドネシアにおける外交関係史に、小谷の名前が見える。例えば政治学者の後藤乾一の成果に名前が出てくるが、小谷を対象とした分析での言及ではなく、多くの登場人物の一人にである。<sup>(10)</sup> 小谷の外交活動は検討すべき課題であるが、本論は宗教研究からの分析であるため、最小限の記述であることを断っておく。

## 二 武庫仏教中学での勉学

小谷淡雲が生まれたのは、熊本県下益城郡小川町（現・宇城市）にある真宗本願寺派の正善寺である。正善寺は、天文三年（一五三四）に開基した寺院である。開創した了誓は、阿蘇家の家臣で御前右京亮平宗次と名乗っていたが、出家して興性寺の擇馨の弟子となり、各地をめぐった後に、寺の建立に至ったといふ。<sup>(11)</sup>

江戸期に薩摩街道の宿場町となった小川は、仏教が盛んな地域である。黄檗版大藏経を開版して飢饉の際に民衆を救済した禅僧の鉄眼（一六二九〜一六八二）の出身地になる。本願寺派では、正善寺近隣の寺院から、二人の「勧学」（僧侶の学階の最高位）を輩出している。延福寺住職の能令速満（一八一二〜一八八六）と正覚寺住職の藤岡覚音（一八二三〜一九〇七）は、真宗教学史に名を残す。

小谷淡雲は、このような仏心篤き郷土のなか、一八九八（明治三一）年二月八日に、正善寺一四世住職の父小谷唯信と母まる（満留）のもとで生まれた。生まれた日は、仏教の開祖釈尊が悟りを開いた成道会の日でもある。その後に僧侶として得度したが、その年月日は、資料の欠損のため未確認である。

兄弟は、長男の徳水、二男の法城、三男の精明、四男の端心、五男の淡雲、長女光子である。特に長兄の小谷徳水（一八八七―一九七一）は、斯界に知られた存在であった。ハワイで開教師を務めた後に、正善寺を出て住職を弟子に譲り、京都に移り主宰した同朋協会での文書伝道、中外日報の勤務を経て、東京で和光女子学院院長、敗戦後は進駐軍の通訳、財団法人仏教徒文化交流協会の理事長を歴任した。ハワイ在任中に仏教讃歌集『らいさん』の制作を発案したが、所載の「恩徳讃」（卜短調、いわゆる「旧譜」）は、宗祖親鸞の和讃に、ハワイでの同僚で東京音楽学校卒業の澤康雄が作曲したもので、作品が生まれた契機は徳水による所が大きい<sup>12</sup>。小谷淡雲は、地元の小川尋常小学校を経て、一九一一（明治四四）年に門主の大谷光瑞が主宰する、神戸の武庫仏教中学校に入学した。同校は同年五月に開校したばかりで、光瑞が有望な青少年を教育したのである。校舎は、神戸の六甲山中にあり、光瑞の別荘の二楽荘に近かった。小谷は、中学校時代を振り返っている。

その気宇の広大なことは二楽荘に象徴されていた。支那室あり、印度室あり、埃及（エジプト）室あり、英国室あり、それぞれにふさわしい調度があるのは勿論のこと中国人のコックや英人のボーイまでいた。／御自身で行われた印度の仏跡踏査、橋（瑞超）先生の中央亜細亜探検、青木（文教）先生の西藏旅行、柱本（瑞俊）先生を主とする馬來半島のゴム園、セレベスの珈琲栽培、爪哇（ジャワ）のシトロネラ香料とカポック棉プランテーション、土耳其（トルコ）の絹工場、さては台湾の農園経営等々、すべて世界的だった気宇の顕現に外ならぬ。／雷がおきらいだったが、雷の様に人を叱られることもあった。然しカラリと晴れるのが例で、後ぐされがなかった。段々やさしくなられて、自動車の中で私達が煙草を吹かすと、

叱らずに、煙りを払い／＼しながら辛抱して御座ることもあった。<sup>13</sup>

小谷は、一九一四（大正三）年に中学校を卒業した。後の人生のなかで、光瑞は要所に応じて指針を与えていた。その光瑞は、大谷家の負債が問題となり、同年五月一四日に本願寺住職、本願寺派管長を辞任した。

光瑞の在世中におけるアジアを中心とした諸活動について、小谷は「当時の客観的状态に於ては、光瑞殿下は日本人仏教徒として最大限の国際性を發揮されたと云つて差支ない」と評する。<sup>14</sup> その後の小谷の人生は、光瑞の関心があつた農業に携わるのである。

### 三 南アジアと東南アジアの各地での活動

#### （一）セイロンのペラデニア熱帯農業学校

小谷は、武庫仏教中学校の卒業後、大谷光瑞の指示によりアジア各地での活動を開始する。一九一五（大正四）年に小谷は、シンガポール経由で、イギリス領マラヤ（現・マレーシア）に渡り、ジョホール州レンガムにある光瑞が経営したゴム園に勤務した。次兄の法城は、「小生末弟淡雲儀新嘉坡〔シンガポール〕、奥のジョホールにて、素〔素封家〕大谷伯の秘書柱本〔瑞俊〕といふ人に従ひ、ゴム栽培を致居申候」と記している。<sup>15</sup>

一九一五（大正四）年末には、イギリス領セイロン（現・スリランカ）に渡航して、翌年に開校したペラデニア熱帯農業学校に入学した。同校は、中部州の州都キャンデイのペラデニア植物園内に所在した。<sup>16</sup>

キャンデイ留学は、光瑞からの命令で農業技術を学ぶことであつた。同地は、精神運動の聖地でもある。日本での南方仏教の戒律移入を目指した真言宗僧侶の積興然（一八四九～一九二四）が戒律を受けた地になる。

一八九〇年に同地のシャム派総本山のマルワッタ寺でスマンガラ僧正から具足戒を受け、法名「ゲナラタナ」と名乗り上座仏教の僧侶となったのである。またキャンデイには、神智学協会の創立者である大佐オルコット (Henry Steel Olcott, 1832-1907) が、一八八七年に開校したダルマラージャ・カレッジがあった。つまり、小谷のセイロン留学は、光瑞の命による仏教を視察するための留学でもあったとも考えられる。

小谷は、一九一七(大正六)年一月にペラデニア熱帯農業学校を卒業した。その後は、同年四月までスリランカの北部のジャフナにある煙草試験場にて技能実習を受けた。次兄法城は、「淡雲はい、成績で卒業しました。もう数ヶ月居つて煙草栽培を研究し、南洋に出掛けるさうです」と記している。<sup>17)</sup>

## (2) シンガポール、セレベスでの農園事業に関与

セイロンを離れた小谷淡雲は、一九一七(大正六)年四月から、イギリス領のシンガポールにある大谷光瑞が経営するゴム園の主任として赴任した。当時の同地には、日本人経営のゴム園が複数あった。小谷が関与したゴム園の詳細は、シンガポール所在の南洋及日本人社が実施した「日本人護謨園調査」に記録があり、権利の名義は柱本瑞俊であった。

ライジングサン園／創業 大正五年五月既成園買収／組織 個人／資本金 六万円／持主 柱本瑞俊  
西本願寺前法主大谷光瑞師の珠籠を受く、年少気鋭の事業家なり、新嘉坡市ビクタリア街花屋旅館内仮  
事務所／租借面積 一〇〇英反／伐木面積 一〇〇／植付面積 八七／切付面積 八〇／植付間隔 十五  
呎方形／切付方式 V字形／採液高(月) 一四〇〇斤／日本人數 男五名／苦力數 支那人十五名、爪哇  
人八名、印度人五名／苦力賃 除草日給五〇仙〔セント〕、採液請負一斤二十八仙乃至三二仙／所在地  
新嘉坡アンモークヨー〔アンモキオ〕／交通關係 新嘉坡市街迄五哩<sup>18)</sup>

小谷は、シンガポールにてゴム園に勤務しつつ、同地を拠点に南洋各地の経済事情を調査した。一九一七（大正六）年五月に次兄の法城は「淡公〔淡雲〕は目下スマトラに煙草園着手の下調に行つてゐる様子」と報告している。同年一月からはジャワ、スマトラを視察した。インド領カラチの三井物産支店に勤務していた法城は、「淡公は今度セレベスに行つた様です。もう「カラチ航路の寄港地である」シンガポールでも会へません。妙な集合離散ですね<sup>20</sup>」という。法城と淡雲の兄弟は、同時期にアジアを往来していたが、すれ違つていたのである。

小谷は、一九一八（大正七）年一月から、オランダ領東インドのセレベス島（現・スラウェシ島）の最北部のミナハサ州メナドにある大谷光瑞の事務所に異動した。同地は、日本人移住者が多数あり、漁業に従事していた。一九一九年五月から、小谷はメナド近郊のノーガンにある大谷経営の珈琲園の事業開始と同時に、主任となった。

一九二〇（大正九）年に、メナドに入港した日本海軍の第一遣外艦隊のある士官は、主任である小谷の案内により、ノーガンの珈琲園内を見学したことについて『台湾日日新聞』に報告している<sup>21</sup>。

その士官によれば、在留日本人による歓迎の催し物の一つに、大谷農園の見学があつたことから、准士官以上三〇名が招待され自動車に分乗して向かつたという。珈琲園は、高原に位置し、「南洋の楽天地と称すべきである大谷伯が斯かる土地を選定された事がヒシ／＼と首肯される」と感心したという。農園は全部が珈琲園でありイギリス人所有の区画を買収したもので、農園四〇〇バウと住宅地一五バウを所有して、その半分で珈琲が栽培されているという。「バウ」はジャワでの土地面積の単位で、一バウは約七一〇〇ヘクタールになる。

農園には、三年木から七年木まであり、種類はアラピカ、リベリカ、ロプスターの三種があり、ロプスター種がもっとも品質が良好と聞いた。農園の地質は火山灰が多量にあるため肥料を用うる必要がないという。現



地人の従業員一五名に、臨時雇用の五〇名を加えて、土地の開墾、雑草の除去、種実の収穫、珈琲の精製などを行い、建物の後方には水力発電所を設け、珈琲豆の精製のための動力と住宅の電灯の電源として用いているという。准士官らは、杜宅にて椰子酒と地元料理の饗応を受けたが、士官は、「小谷氏の流暢なる美文的なる挨拶には感心した。午食終て庭園にて記念撮影をなし特に一行招待の為集められたるミナサ美人の舞踏を見物し午後四時帰艦の途に就く際に農園の写真と珈琲の小袋を記念にとの小谷氏の厚意を感謝」したという。別のジャワ在住の日本人の眼には、「大谷光瑞師とその一門は、目立たぬ存在乍ら爪哇在留者の項目にも入れられるべきであろう」と述べている。小谷は、一九二〇（大正九）年七月に、ジャワ島のスラバヤにて白石静枝と結婚した。<sup>(23)</sup>

### (3) 財団法人南洋協会ジャワ支部

小谷は、セレベス島ノーガンから、ジャワ島バタビヤに転居した。一九二一（大正一〇）年九月に、財団法人南洋協会のジャワ支部の常任幹事に就任したからである。<sup>(24)</sup>

南洋協会は、一九一五（大正四）年に東京で設立され、初代会頭は伯爵の芳川顕正（一八四二～一九二〇）であった。会の規約によると「第二条 本会ハ南洋ニ於ケル諸般ノ事項ヲ講究シテ相互ノ事情ヲ疎通シ共同ノ福利ヲ増進シ以テ平和文明ニ貢献スルヲ目的トス」と謳った団体であるが、南進論の世論と政策の形成に影響を与えた団体である。

ジャワ支部は、一九二一（大正一〇）年六月に、在バタビヤ帝国総領事の松本幹之亮ほか内外の有力者の斡旋により設立された。設立当初のジャワ支部役員は、支部長は松本幹之亮、評議員は原口竹次郎、半田治三郎、鷺尾磯一、松下亮男、安藤珍成、菊地泰、常任幹事は小谷淡雲であった。<sup>(25)</sup>

同支部の活動について、「南洋協会爪哇支部規約」によれば、「第二条 支部は蘭領東印度に於ける企業、貿易、制度其他諸般の事情を調査し、出版物を刊行し以て日蘭通商の助長に務め併せて両国民の交誼を図ると目的とす」<sup>27)</sup>とあるように、現地での情報収集が目的であった。

支部での調査成果は、蘭印での経済と地域事情を速やかに知らすため、協会支部会員や各方面に配布した隔週発行の彙報に掲載したほか、一九二四年からは『蘭領東印度時報』を発行した。また『南洋協会雑誌』（東京の本部発行）や『南洋経済時報』（同協会新嘉坡商品陳列館発行）にも、レポートを掲載した。例えば小谷は、『南洋経済時報』にオランダ本国における憲法改正に伴う植民地行政の組織改編について、自主権と自治権の拡大について報告している。<sup>28)</sup>

小谷が調べた情報は、一九二六（大正一五）年に大阪朝日新聞記者の西村道太郎と白川威海による現地事情の記事中にて引照されている。記事によれば、小谷はオランダ領東インド産の農作物に対する日本人の投資額を調査したが、蘭印全体での総額は、二七二六万六一〇〇ギルダー（うちジャワ、九九二万五〇〇〇ギルダー）と報告して、各種農作物（ゴム、砂糖、椰子、茶、油椰子、サイサル〔サイザル麻〕、珈琲、シトロネラ、胡椒、印度藍、規那〔キノノキの乾燥樹皮〕、ポテト）の内訳も記したという。<sup>29)</sup>

植民地台湾は、日本人の南洋活動の拠点となっていたが、小谷は台湾在住の同胞に向けて、南方への事業進出を呼び掛けた。小谷は、一九二四（大正一三）年二月二〇日には、台北の台湾総督府庁舎内の第一階食堂で講演を行った。小谷は、「南洋で企業するに当つて先づ何が一番有望であるか其利潤率の順序を申し上げますとホテル業を最高に鉱業、栽培、銀行鉄道工業倉庫、船船、海運、雑業、商業、保険の諸業の順序になる」<sup>30)</sup>と断つた上で、ホテル業と保険業は欧州人が既に地盤を築いており、鉱業は欧州の大手企業が長年にわたり利益を上げて、日本人は個人で関わる余地はなく大資本の介入が必要となるため、日本人が行う事業として栽培事

業が適当であり将来性があることを力説した。この講演は時間の都合上、農業を中心に語ったものである。水産業にも可能性を持つことを認識していたらしく、講演後に、台湾日日新報の記者に対して語ったところでは、「爪哇では砂糖其他各種の事業は大発展を遂げて居るけれども独り水産業のみは全く手が著けられて居ない状態である」<sup>(31)</sup>として、日本人に漁業の参入とその可能性を訴えた。小谷は、南洋の後背地としての台湾の地位を認識していた。このような知見は、光瑞の影響であろう。

#### (4) 台湾総督府の事務嘱託

南洋協会爪哇支部では、台湾総督府から業務の委託を受けていた。同府から小谷が嘱託を命じられた用務は、次の三件である。

「爪哇バンドン年次産業展覧会ニ関スル事務」(一九二二年八月〜一九二三年三月)では、同府殖産局の嘱託として、一九二二年にジャワ島のバンドンで開催される産業展覧会に、台湾の物産品を展示する段取りを行った。説明書の翻訳、陳列、広告、報告書の作成に携わった。

「バンドン茶共進会ニ関スル事務」(一九二四年五月〜二月)では、同じく殖産局の嘱託として、製茶産業の振興を行うべく各地から出展された茶葉の優劣を品評するバンドン開催の共進会において、台湾産の包種茶と烏龍茶などの販路拡大を行うべく、茶葉の見本陳列を担当した。

「南洋ニ於ケル制度及経済調査ニ関スル事務」(一九二五年一月〜一九二六年四月)では、同府官房調査課の嘱託として、計一三九日(内訳、航海日数六四日、視察日数七五日)をかけて、フランス領インドシナ、イギリス領の海峡植民地とマラヤ連邦、オランダ領東インド、アメリカ領フィリピンなど、南洋一帯を調査視察したものであった。

後述するように領事館に着任後は、南洋協会ジャワ支部の評議員を務めて、外交官の立場から協会の事業に協力した。<sup>32)</sup>

#### 四 バタビヤ領事館

##### (1) 副領事・領事代理の就任

オランダ領東インドのバタビヤに、帝国領事館が設置されたのは、一九〇九(明治四二)年三月である。<sup>33)</sup>一九一九(大正八)年五月には総領事館に昇格したが、一九四一(昭和一六)年二月のオランダを含む連合国への宣戦布告と共に、総領事館は閉鎖された。

総領事館では、総領事、領事、副領事、領事代理の序列がある。小谷は、一九二八(昭和三)一月に、現地採用で副領事(高等官七等)となり、バタビヤ総領事館に勤務した。総領事が着任しない時期には、総領事代理を三回務めた。一九三一年八月に東京世田谷の国士館高等拓殖学校にて、文部省・拓務省共催「移植民教育講習会」が開かれ、小谷は、外務省副領事の肩書で「南洋経済事情」の演題で講演した。小谷は、「南洋には前後十七年居りまして、丁度日本に生れてから居りました時間と同じ位でございます。其間には馬來半島やシンガポール方面に二年、セーロンに約二ケ年、バタビヤに十年、それからセレベスにも約二ケ年半、其他を旅行に費しまして、多少は暹羅(シヤム、現・タイ)フィリピン辺りも少しは見た」という。<sup>34)</sup>

外務省通商局では、雑誌『移民情報』を発行していた。日本内地向けの雑誌で、海外移住者に関する情報が掲載されている。現地からの小谷の報告が掲載され、バタビヤでの歯科医開業に関する試験の規定、オランダ

人学生が多いバタビヤ医科大学（現・アイルランガ大学医学部）における日本人の入学方法について報告<sup>(35)</sup>、またオランダ領東インドには、沖繩や鹿児島を中心に日本から漁業移民が多数いたが、同地における漁業関係の法規における罰則規定の改正を伝えた<sup>(36)</sup>。

小谷は、一九三八（昭和二三）年四月に、高等官六等となり、一九四二年七月には叙勲五等、瑞宝章を受けた。

## （2） 日蘭会商

小谷は、重要な外交交渉に関わった。それは現在のインドネシアの領域を統治した宗主国オランダとの間で行われた経済交渉、すなわち「日蘭会商」である。この交渉を巡っては、日本とオランダの経済摩擦に始まり開戦に至るまでの交渉であったため、近代史において重要な事案として知られる<sup>(37)</sup>。

日蘭会商は、計二次にわたって行われた。第一次の会商とは、日本商品のうち綿製品の進出に危機感を抱いた蘭印当局側の要請で、一九三四（昭和九）年六月バタビヤで開始された。当初は業者間の交渉であったが成果を得ず、政府間での交渉となったが数度の決裂を経て、一九三七年四月に日蘭通商協定（石沢―ハルト協定）が結ばれ、並行して海運関係の会商が行われた。

第二次の会商は、ナチス・ドイツがオランダ本国を占領した後の一九四〇年五月に、日本はアメリカの対日輸出制限を打開するために、東インドの軍需資源に目をつけて、蘭印政府に会商を申し入れたことによる。同年八月、商工大臣の小林一三をバタビヤに派遣して、その後は元外務大臣の芳沢謙吉を後任の使節として交渉を続けた。しかし日本側の要求が大きいため、一九四一年六月に交渉が打ち切られた。同年一二月に開戦となるのである。

外務省が編纂した『日本外交文書』に、日蘭会商の重要な公文書が翻刻されているが、小谷の氏名がある三

件の文書が掲載されており、会商の舞台で重要な役割を担っていたことが分かる。<sup>(38)</sup> 小谷は、「二億円の日本円を買ひ得る国は少ない。企業と貿易と人間と三拍子そろつて發展出来る国も少ない。三百年間ケンカをしなかつた国も少ない。日、蘭印会商が真面目に、協調的に、共存共榮的に考へられねばならぬ所以である」<sup>(39)</sup>と述べて、オランダとの相互理解を求めていた。その後は、日本本土に戻り、一九三九年頃は外務省の欧州局第三課に勤務した。<sup>(40)</sup> しかし後述するように、開戦後には陸軍司政官としてバタビヤに赴くのである。

## 五 バタビヤの日本人

### (一) 在留日本人とバタビヤ日本人会

ジャワ島のバタビヤへ最初に来た日本人は、一八八三(明治一六)年頃に渡航した、西田トメという女性とされる。<sup>(41)</sup> その後、貧しさゆえに「からゆきさん」や「娘子軍」と呼ばれる日本から出稼ぎ女性の渡航が相次いだ。商用目的の居住者も増えてきて、一九一三(大正二)年一〇月に、バタビヤ日本人会(後・社団法人)が結成された。<sup>(42)</sup> 小谷は、前述のとおり一九二一年からバタビヤに関わる。小谷は、雑誌『大乘』に、現地の模様を寄せているが、当時の時代状況が分かるので紹介したい。

蘭人間にも近ごろ日本語熱が盛んである。主な新聞は大ガイ〔大概〕日本の新聞を取り、読み、転載してゐる。岩槻〔東京無線電信局岩槻受信所〕の無電ニウスは電報欄の相当なスペースを埋めてゐる。内地でも余りヘンな事は云つたり、書いたりして頂き度くない。／＼ Grondijs と云ふ人が Wat wil Japan と云ふ本を書いた。日本、満洲、支那を見た上である。とてもよく認識してゐる。バンドンの陸軍省にゐる

プール大佐は日本語で蘭語文法を書いたり、無料で蘭語を教へたりする傍ら、日本及び日本人に関する誤解の一掃に努力してゐる。日本の友も少くはない。／印度欧人協会と云ふ混血児団体の創立十五周年祝賀会に奇麗なお嬢さん達が「はるさめ」の踊りを日本人のお婆さんからならつて踊り、アンコールをしなればならぬ程のカツサイ〔喝采〕を博した。日本文化の紹介に有難い出来事だつた。<sup>(15)</sup>

一九三六（昭和一一）年の初めに、小谷は一時帰国した。同年三月一八日には、兄の小谷徳水が当時に勤務していた中外日報社を訪れて、現地における日本人事情を次のように語っている。

何しろ寒いのに驚いてゐます。最高五度などと聞いてびくびくしてゐたが、室戸崎から四国を眺めつゝ、震へ上つてしまつて、もう十日間も風呂へ入らないといふ始末です。帝都事件（二・二六事件のこと）は二七日にラジオで聴いて驚いた。向うは日蘭会商が纏まらぬので八千人の在留邦人にとつても悩みです。スマトラには本願寺の出張所もあるが、ジャワには何もない。バタヴィアの和蘭人の共同墓地に日本人の納骨堂をつくり光瑞さんの御名号を掲げてゐる。ジャワ島に最近日本人の基督教会ができて和蘭人、土人〔現地人〕のクリスチャンも参加して盛大な式が催された。在留邦人は大部分は商人で銀行、会社や、沖繩辺から出かけた漁師、ゴム、茶等の農場などをやつてゐる。宗教的には個人的には種々な悩みや要求ももつてゐるが、団体的に求めてゐるところ迄にはゆかぬ。火葬など極めて原始的な方法で海岸の砂に穴を掘つて薪を積んで焼くのである云々。<sup>(16)</sup>

小谷は、一九二八（昭和三）年からバタビヤ日本人会の公選評議員を務めていた。<sup>(15)</sup> バタビヤ日本人会の組織と目的は、会則によれば、「第二条 本会ハバタビヤ州及其附近ニ在留スル日本人及日本人経営ノ法人並ニ商店ヲ以ツテ組織ス」、「第三条 本会ハ在留日本人ノ親睦、矯風、公益、福祉ノ増進ヲ図ルヲ以ツテ目的トス」<sup>(16)</sup>とある。事業として、「（一）学務部―小学校経営（予科及尋常六年）（二）運動部―庭球、野球、陸上運動会

(三) 娯楽部―撞球、卓球、碁、将棋、図書 (四) 購買部―味噌、醤油の輸入販売<sup>17)</sup>を行い、在留日本人の生活を支援していたのである。

## (2) バタビヤの日本人納骨堂

前述の引用文にある日本人の納骨堂とは、ジャカルタのタナ・アバンにあるプタンブラン墓地内に所在する。在留日本人の葬祭を目的に、有志七人が発起人となり、バタビヤ日本人共済会(一九二三年発足)の事業として、一九三一(昭和六)年に建てたものである。その際、バタビヤ市内に分散していた日本人女性の墓を集めて安置したという。現存する過去帳によれば二七七柱(物故した年代は、明治期三五、大正期六七、昭和期一五四名、不詳二一)の遺骨が安置されている。物故者の出身地は、北は樺太から南は沖縄まで各地に及ぶ<sup>18)</sup>。

先に『中外日報』における小谷の発言を引用したが、文中の「光瑞さんの御名号」について詳細を見よう。これは礼拝用の本尊で、大谷光瑞が「南無阿弥陀仏」と墨書したものである。共済会副会長の佐藤秋次郎が、その経緯を記している。神奈川の平塚出身の佐藤は、一九一六(大正五)年にジャワ島に渡って一八年間の滞在生活を送り、バタビヤで佐藤商店を営んだ人物である。そもそもバタビヤで故人の遺骨を安置する施設を作るにはよいが、納骨堂の「精神」について、思い悩んでいたという。結果、光瑞に名号を依頼することになった。祖国から遠く離れた、無垢で無名の在留日本人の心情が伝わる率直な文章なので、長くなるが引用する。

納骨堂建立 ……わたし達に取つては、何んと言ふ幸運だつたのでせう。……バタビヤから七、八十キロ離れたスカブミに大谷光瑞氏が農園を経営して居られて、大谷光瑞氏は時々このスカブミの農園へ見えられてゐたのです。／納骨堂の精神。――つまり、納骨堂の魂は大谷光瑞氏にお願ひ出来れば、これは、何んと言ふ幸運であらうかと思ひました。／併し、わたし達はスカブミの大谷光瑞氏とは一面識もありま



せん。勿論、面識の無いわたし達がお願ひに行ける道理がありません。／すると、何処迄も、この納骨堂の建立は幸運に恵まれてゐるのか、小谷副領事が大谷光瑞氏とはとても親しい関係を持つてゐて、聞くところに依れば、親子（のような）関係を持つてゐるといふ話です。／わたし達ではお願ひするにも、お願ひする順序が取れませんでした。この小谷副領事から大谷光瑞氏へお願ひして頂きました。／……

大谷光瑞氏の真筆　納骨堂の魂に大谷光瑞氏が其の真筆を納めて呉れるといふのは、更に、海外に働く同胞を安心させました。／併し、此処で大谷光瑞氏にわたしは頭が下りました。簡単に口で、言葉で、感激したなんていふ生やさしいものではありません。／小谷副領事からの依頼を受けた大谷光瑞氏は、——納骨堂の魂になるやうな大切な物を出先で書く訳にはゆかない。一度、東京へ帰つて東本願寺に於いて書きませう。／わたしが直接に聞いた言葉ではありませんから、その文句は解りませんが、大体に於いて、かういふ意味のことを言はれたさうです。／大谷光瑞氏程の人が、さういふ大切な物を出先で書く訳にはゆかないから——とは、何んと温い心でせう。／わたしはこの事を思ふと、今でも熱いものが込み上げて来ます。この納骨堂の魂には、大谷光瑞氏の念仏の真筆が納められてあります。わざ／＼内地へ帰られて、書いたものですから、わたし達は深くこの事を銘記しなければならぬと思ひます。

バヤビヤの日本人納骨堂に、大谷光瑞の直筆による名号が納められたことは、佐藤の表現を借りれば「納骨堂の魂」を入れたことにならう。本来の浄土真宗の教えとは異なる考え方とはいえ、故国から遠く離れた南洋の日本人にとって大きな心の支えとなり、日本という故郷とのつながりの象徴となつたのである。

なお、日本人納骨堂は、戦争の混乱で荒廃したが、一九五九（昭和三四）年に有志により日本人墓地保存会が結成され、一九六〇年には第一回合同慰霊祭が行われ、現在でも毎年春秋二回が行われている。光瑞筆の名号は、現存しないと見られる。

(3) 大谷光瑞からの教え

バタビヤの日本人納骨堂での逸話のとおり、外交官になった後でも、大谷光瑞と小谷淡雲の交流は続いた。外交官として、ユーラシア大陸を貫くシベリア鉄道に乘車して欧州出張に向かう際の逸話が残されている。

〔外交官の時に〕 外交伝書使として欧州に行く前、「光瑞へ」挨拶に御伺しておねだりしたら「精進不退」と書いて下され、官吏の本分を尽す一助として「金光明王最勝王経」を読めと云われた。黄色の部厚いのを買って、シベリア鉄道の往復共読み続けたものである。／猥下のこととはよく夢に見る。何時でも明るくて朗らかであられる場面は忘れ勝ちだが、印度洋上を船で行った思出が割合に永く残っている。／謙遜な猥下のことだから自分で云われたことはなかったと思うが、内心では還相の菩薩行をしているのだとの御自信が強かったと察している。<sup>50)</sup>

小谷は、バタビヤから一時的に東京に戻った際に記した文章に、仏典の解釈について述べている。

先日、「大谷光瑞」猥下からいろいろ有難い御示教を承りました。大経（仏説無量寿経）の中に「是ノ二菩薩（觀世音、大勢至）此ノ国土ニ菩薩ノ行ヲ修シ命終転化シテ彼ノ仏国ニ生ゼリ」とありますが、「此国土」が此の娑婆世界だと云ふ事をハッキリ教へて頂だいて、大変なつかしいものを感じました。<sup>51)</sup>  
 ……そんな事も知らなかつたのかと笑はれるかも知れませんが、私に取つては一つの発見と歓喜でした。

小谷の人物評について、「氏を指導したのが有名なアジア経論者大谷光瑞師であつたため、小谷氏の理想の精神的基盤が大乗仏教に深く根差していたことは疑う余地もない」とある。<sup>52)</sup> 外交官時代の小谷は、在留日本人から評価されていた。後年に財団法人日本インドネシア協会（現・一般財団法人）では、次のように紹介した。

昭和三年から副領事としてジャカルタに勤務しはじめてから終戦までインドネシア在留の日本人と深い関係をもち、歴代の総領事の名は知らなくても小谷領事を知らぬものはなかったほど内外人の間に信頼を得ていた。……セイロンで学んだ英語、インドネシアで学んだオランダ語はつねに在外日本総領事館の至宝であった。南方生活中の激務から開戦、終戦のあとを受けて、昭和二八年から心の故郷である仏教研究の生活に入り……活躍した。<sup>53</sup>

小谷が在留日本人から支持を受けたのは、南洋移民に熊本県出身者が多くいたこともある。なにより外交官である前に一人の僧侶であったことから、人々に寄り添っていたのが大きいと言えようか。

## 六 戦時中の陸軍司政官と戦後のGHQ勤務

一九四一（昭和二六）年一二月の開戦以降、日本軍はオランダ領東インドを攻略して、一九四二年三月七日から軍政を実施して、三月九日にオランダ軍が降伏した。日本本土からの軍政要員を増派して、同年七月二〇日にはジャワでの作戦を担当した陸軍第一六軍（治集団）に軍政監部（通称・ジャワ軍政監部）を設置して、軍による行政が本格化した。同軍の施策により、同年一二月九日から、バタビヤからジャカルタに地名を改称した。<sup>54</sup>

一九四二（昭和二七）年二月現在の外務省職員録によれば、小谷はバタビヤ総領事館の領事として氏名はあ  
るが、「御用帰朝者」として現地には滞在していなかった。<sup>55</sup> 小谷は、同年三月に、第一六軍軍政監部附となり、  
外務省の職員のまま徴用されて南方占領地での軍政に従事したのである。一九四三年二月二六日付けで、陸軍

司政官高等官四等が発令となり、同年八月四日付で領事となった。<sup>(56)</sup>その後、日本本土に帰任した。

敗戦後の一九四五（昭和二〇）年一月二〇日、東京の外務省本省にある終戦連絡中央事務局総務部に異動となり、連絡官として勤務した。後に、同省調査局第一課の臨時兼務となった。一九四六年一月に高等官三等となるが、同年三月に退官した。

一九四六（昭和二一）年三月から、東京市ヶ谷台にある元陸軍省ビルの管理人となるが、この建物で連合国側が日本の戦争指導者の責任を追及した特設法廷である、極東国際軍事裁判（東京裁判）が開かれたのである。一九四七年九月からは、連合国総司令部（GHQ/SCAP）の民間情報教育局（CIE）宗教文化資源課に勤務した。同課には、日本人スタッフが複数いたが、大谷光瑞門下のチベットの学者である青木文教（一八八六～一九五六）もいた。GHQは、神道指令により国家から神道色を取り除き、宗教団体を厳しく監督した宗教団体の廃止を命じて、新たに宗教法人令を制定するなど、政教分離の徹底を進めた。小谷は調査活動を担当する日本人職員の一人であり、一九五二年四月のサンフランシスコ平和条約の発効まで勤務した。

その後は、民間人の立場から、自分の出自である仏教と関わる。米国のアジア財団からの支援で、一九五六（昭和三一）年三月に、財団法人仏教徒文化交流協会が設立された。全国一三の仏教系大学の学長を顧問に据え、長兄の小谷徳水が理事長、小谷淡雲が事務局長となり、日本人仏教学徒の海外活動を支援した。また語学力を生かして、東京商工会議所渉外部囑託も務めた。財団法人日本心霊科学協会（現・公益財団法人）の設立と運営に関わり、スピリチュアリズムの思想と哲学に関心があった。<sup>(57)</sup>神秘体験で知られるインドの宗教家ヴィヴェーカーナンダ（Swami Vivekananda, 1863-1902）の翻訳を手掛けたことにも関係しよう。<sup>(58)</sup>

小谷は、一九六五（昭和四〇）年一月三〇日、東京の武蔵野日本赤十字病院にて六七歳で往生した。同年二月一〇日に東京杉並の築地本願寺和田堀廟所にて葬儀が行われた。本願寺門主の大谷光照より「唯信院釈淡

雲」の院号が贈られ、墓地は多磨霊園にある。

## 七 おわりに

小谷淡雲の生涯は、大谷光瑞の薫陶を受けて、青年期から壮年期にかけて南アジアと東南アジアで活動して、晩年期は仏教に関わった人生であった。小谷は、僧侶として直接の宗教活動は皆無に等しいが、その針路と背景には大谷光瑞が深く関わったと言えよう。本論の冒頭でも指摘したように、光瑞に関する研究は、既に複数の蓄積があるが、これまで不明であった小谷の足跡は、本論により明らかとなった。光瑞が実践した領域のうち、武庫仏教中学での教育、南洋における農園事業、アジアでの外交活動において、小谷は関わったのである。光瑞の人物育成により小谷という人材を生み出したが、その履歴を見ることで、光瑞が育成した人材の分野の広がりを把握する手掛かりとなるのである。

小谷は、戦後日本の再建に関与したことを紹介して本論を終えたい。それは、ウッダード (William Parsons Woodard, 1896-1973) との交流である。ウッダードは、アメリカン・ボードの派遣により戦前の日本と朝鮮の各地で布教した、キリスト教のプロテストヤント・会衆派の宣教師であった。戦後に再来日して、一九四六 (昭和二一) 年にGHQの民間情報教育局宗教文化資源課に勤務して、小谷とは同僚となった。

ウッダードは、自身が体験した占領時代のGHQの宗教政策を客観的かつ学術的に記述すべく、一九七二年に単著 *The Allied Occupation of Japan 1945-52 and Japanese Religions* (一九四五年から五二年までの連合国の日本占領と日本の宗教) を刊行した<sup>⑧</sup>。同書は、アメリカの日本研究における重要な文献として、引用される

ことが多い。後に、日本語の翻訳も出たが、原著の冒頭にあった献辞文は、残念ながら翻訳者は省略した。原著にある献辞は、二人の日本人に捧げられている。

すなわち、同書は「私の尊敬する友人と同僚に捧げる。浄土真宗の熱心な信徒の小谷淡雲」(Dedicated to My esteemed friends and colleagues / Tanun Kotani (1896-1967) / Devout layman of True Pure Land Buddhism)とある。続けて大石秀典(一九〇三―一九九六)の名前があるが、曹洞宗僧侶の大石は、新宗教団体の連合組織である財団法人新日本宗教団体連合会(新宗連、現・公益財団法人)の初代事務局長を務めた人物である。

ウッダードは、一九五二年の占領終了後は米国に戻ったが、直ぐに再来日して宗教学者でGHQの宗教政策の顧問を務めた岸本英夫らと共に、ディアボーン基金の支援により、一九五四(昭和二九)年に財団法人国際宗教研究所(現・公益財団法人)の設立に関わった。ウッダードは長らく所長を務めたが、一時期に小谷は次長でもあった。

占領下の宗教政策の立案に大きく関わったウッダードは、施策の立案に際し、小谷に対して仏教を含む日本の宗教事情について助言を求めた。キリスト者と仏教者の対話でもあり、勝者と敗者を越えた友情関係を結んだのである。

## 註

(1) 小谷淡雲の略歴は、主に台湾総督府の公文書及び遺族がまとめた年譜を参照して、適宜に他の資料で補足した。

台湾総督府の公文書とは、敗戦後に中華民国が接収した当該文書群について、電子化して公開する国史館台湾文献館が運営するデジタルアーカイブ「台湾総督府檔案」(<http://ds3.tn.gov.tw/ds3/app000/>)から、小谷に関する公文書に添付され

た履歴書を参照した。引照したのは、次の二件である。第一に、件名「小谷淡雲バンドン茶共進会ニ関スル事務ヲ囑託ス」(冊号/文号 03860/026、典藏号 0000380026、時間 1974-06-01 (大正一三年)、備註 大正十三年永久保存進退(判) 第四卷)。第二に、件名「小谷淡雲(南洋制度経済調査事務囑託、手当)」(冊号/文号 04012/062、典藏号 00004012062、時間 1925-12-01 (大正一四年)、備註 大正十四年永久保存進退(判) 第五卷)。

遺族がまとめた年譜とは、小谷淡雲『南域記』(私家版、一九六五年)所収の「小谷淡雲年譜」(一五一〜一五二頁)である。同書は、各種雑誌に寄稿した論考を元に、没後に兄小谷徳水が編集して、三男の白石三郎(母方の姓を継承)の名義で作製した私家版である。

なお、小谷淡雲の生年について、台湾総督府の履歴書と遺族編纂の年譜では異なる。前者は一八九八(明治三二)年、後者は一八九七(明治三〇)年とある。前者は本人がまとめた履歴であるため、本論では前者の年次を採用する。また本論での引用文について、適宜に句読点を補訂した。

(2) 「在外帝国領事館管轄区域(明治四二年三月六日外務省令第一号)」(『官報』第七七〇五号、印刷局、一九〇九年三月六日)によれば、「蘭領爪哇島」(「バタビヤ」)駐在帝国領事官(一五六頁)とある。バタビヤ領事館は、同年三月一日に開館した。

(3) 白須淨真編『大谷光瑞と国際政治社会―チベット、探検隊、辛亥革命』(勉誠出版、二〇一二年)、同編『大谷探検隊研究の新たな地平―アジア広域調査活動と外務省外交記録』(同、二〇一二年)、同編『大谷光瑞とスヴェン・ヘディン―内陸アジア探検と国際政治社会』(同、二〇一四年)。柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』(同、二〇一〇年)、同編『大谷光瑞―「国家の前途」を考える』(アジア遊学第一五六号、同、二〇一二年)、柴田幹夫『大谷光瑞の研究―アジア広域における諸活動』(同、二〇一四年)。

(4) 小出享一「大谷学生と瑞門会」(前掲、柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』)。

(5) 加藤斗規「大谷光瑞と南洋」(前掲、柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』)。

(6) 玉井鉄宗「大谷光瑞の提唱する「熱帯農業の興義」に関する農学的検証」(『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第五五号、二〇一六年)。

(7) 三谷真澄「仏教と農業のあいだ―大谷光瑞師の台湾での農業事業を中心として」(『台湾の日本仏教―布教・交流・近代化』アジア遊学第二二二号、二〇一九年)。

- (8) 「共同研究 研究課題「大谷光瑞のトルコでの動向―「仏教」と「農業」のあいだ」(「龍谷大学国際社会文化研究所紀要」第二二号、二〇一九年) 所収の三谷真澄「大谷光瑞のトルコでの動向―「仏教」と「農業」のあいだ」、ヤマンラール水野美奈子「大谷光瑞のトルコでの殖産事業研究の新資料紹介」、高満也「大谷光瑞とケマル・アタチュルクのアンカラ・アヒマストド農園での共同事業について」。
- (9) 前掲、柴田幹夫「大谷光瑞の研究」、四頁。柴田は、「本願寺」教学参議部編『清国巡遊誌』(朝倉明宣、一九〇〇年、御親論二頁) から光瑞の発言を引用した。
- (10) 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア―一九三〇年代「南進」の論理・「日本観」の系譜』(勁草書房、一九八六年)、三二七、三二九、四五五頁。
- (11) 小川町史編纂委員会編『小川町史』(小川町役場、一九七九年)、九六頁。
- (12) 小谷徳水編『らいさん』(布哇別院日曜学校、一九一七年)。海谷則之「恩徳讃ものがたり」(本願寺出版社、二〇一八年)、七―一六頁。なお戦後になって真宗大谷派寺院出身の清水脩が、「恩徳讃」(へ長調、いわゆる「新譜」)を作曲したが、澤康雄の旧譜は今でも親しまれる。
- (13) 小谷淡雲「菩薩行者」(「大乘―ブティストマガジン」第五卷第一〇号、「光瑞上人特集号」、大乘刊行会、一九五四年)、一六頁。なお同号に、小谷徳水「六甲山」が掲載される。
- (14) 小谷徳水「無題録」(「瑞門会誌」第六号、瑞門会、一九六〇年)、一七頁。
- (15) 小谷幹子編・発行「法城遺稿」(私家版、一九二二年)、一八四頁。一九一五(大正四)年七月二四日付でボンベイの小谷法城から光永星郎宛の書簡。同書は、次兄法城が没後に、兄弟及び関係者宛ての書簡をまとめた内容である。光永は、熊本出身で広告代理店電通の創業者。法城が東京高等商業学校(現・一橋大学)の在学中は光永宅に寄宿した。編者は法城妻。
- (16) ペラデニア熱帯農業学校は、一九六六年にキャンディ県クンダサーレにある別の農業学校と合併して、現在はスリランカ農業省普及訓練局所管のクンダサーレ農業学校である。国立ペラデニア大学農学部とは、別組織になる。
- (17) 前掲、小谷幹子編「法城遺稿」、一三三―一三四頁。一九一七年一月二日付でカラチの小谷法城から小谷徳水宛の書簡。
- (18) 南洋及日本人社編纂部編「馬來に於ける邦人活動の現況」(南洋及日本人社、一九一七年)、「記事の部」二―三頁。ゴム園の場所は、小谷が記載した前述の台湾総督府の履歴書によれば「新嘉坡リマベト」とある。
- (19) 前掲、小谷幹子編「法城遺稿」、二四三頁。一九一七(大正六)年五月一八日付でカラチの小谷法城から小谷徳水宛の書簡。



- (20) 前掲、小谷幹子編『法城遺稿』、二五二～二五三頁。一九一七（大正六）年一月一日付で東京の小谷法城から小谷徳水宛の書簡。
- (21) 無署名「光瑞師の活躍せるセレベス島のノンガン／珈琲園三百七十町歩の主／私設の水力発電所あり／第一遣外艦隊員の通信 上・下」〔台湾日日新報〕第七三三一、七三三三号、一九二〇年七月二七、二九日）、四、八頁。神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」より。
- (22) 菅沼毅「日本から爪哇旅行の人々」〔武田重三郎編『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡』武田重三郎、一九六八年）、二六四頁。
- (23) 前掲、小谷淡雲『南域記』によれば、小谷の子息は、「美知、豊、三郎、美恵子の二男二女あり。豊は終戦後死亡、三郎は母方の姓を嗣ぐ」（二五一頁）とある。
- (24) 台湾総督府の履歴書には、一九二二（大正十）年九月に「大谷師ノ許可ヲ得テ南洋協爪哇支部ニ入ル」とある。
- (25) 南洋協会編『会員名簿―大正十四年七月一日』〔南洋協会、一九二五年）、（IV）頁。なお、財団法人南洋協会は戦後に長らく休眠法人であったが、その法人格は、一般財団法人アジア・南洋協会に継承された。
- (26) 堀口昌雄編『南洋協会十年史』〔南洋協会、一九二五年）、二四三頁。
- (27) 前掲、堀口昌雄編『南洋協会十年史』、二四四頁。
- (28) 小谷淡雲「来る可き政体組織の変更と地方行政の改革 一〇七」（『南洋経済時報』第五卷第七号／第六卷第二号、南洋協会新嘉坡商品陳列館、一九二三～一九二四年）。
- (29) 西村道太郎、白川威海「南洋雜感二二／邦人経営の農場／ジャワでの法人投資額」〔大阪朝日新聞〕、一九二六年一月二日）。前掲、「新聞記事文庫」より。
- (30) 無署名「邦人の南洋発展には栽培事業が最も好適／小谷淡雲氏講演 上」〔台湾日日新報〕第八八四〇号、一九二四年一月二二日）、二頁。前掲、「新聞記事文庫」より。
- (31) 無署名「別天地を開拓せよ／有望な瓜哇の水産業／まだ手が附けられて居ない」〔台湾日日新報〕第八八四二号、一九二四年一月二四日）、二頁。前掲、「新聞記事文庫」より。
- (32) 南洋協会編『南洋協会会員名簿―昭和十二年十二月十日現在』〔南洋協会、一九三七年）、三五頁。
- (33) 「明治四一年」外務省告示第三号〔蘭領爪哇「バタビヤ」ニ帝國領事館ヲ設置〕〔『官報』第七七〇三号、一九〇九年三

月四日)、九五頁。

(34) 小谷淡雲「南洋経済事情」(拓務省拓務局・文部省実業学務局編『最近の海外移住地』明文堂、一九三二年)、二七九頁。

(35) 「バタビア」に於ける齒科医開業試験規定―昭和四年十一月四日附、在「バタビア」小谷総領事代理報告」(『移民情報』第一巻第一二号、外務省通商局、一九二九年)、六九頁。「在「バタビヤ」医科大学の制度要領と日本人の入学に関する同大学々長の回答原文―昭和五年二月五日附、在バタビヤ小谷総領事代理報告」(『移民情報』第二巻第三号、一九三〇年)、四四―五二頁。

(36) 「蘭領東印度沿岸漁業令中罰則規定改正―昭和八年四月十三日着、在「バタヴィア」小谷総領事代理電報」(『移民情報』第五巻第五号、一九三三年)、五九頁。

(37) 日蘭会商については、籠谷直人「日蘭会商(一九三四年六月―三八年初頭)の歴史的意義―オランダの帝国主義的アジア秩序と日本の協調外交」(『人文学報』第八一号、京都大学人文科学研究所、一九九八年、一―四六頁)、安達宏昭『戦前期日本と東南アジア―資源獲得の視点から』(吉川弘文館、二〇〇二年)所収の「第二章 蘭印への進出」を参照のこと。

(38) 外務省編『日本外交文書 昭和期Ⅲ 第二巻―昭和十二―十六年 欧州政情・通商問題』(外務省、二〇一四年)に掲載された、小谷淡雲の氏名がある文書は、次の三件である。

① (文書番号) 九三八 昭和一二一年四月九日 署名/日蘭印間通商関係に関する石沢・ハルト覚書/付記一 右和訳文/二昭和一二一年三月二六日、通商局第三課作成 日蘭会商に関する参考資料/三 昭和一三年一月二七日署名/在日蘭商と本邦輸出組合との関係調整に関する小谷・ファンモーク覚書 and 訳文(一九二―二〇七頁)。

② (文書番号) 九三九 昭和一二一年七月二日 広田外務大臣より在バタビア小谷(淡雲)総領事代理宛/蘭印における輸入制限に関する石沢・ホーフストライテン会谈要領の送付について/通三機密第八六号/昭和拾貳年七月廿壹日/外務大臣 広田弘毅(二二〇七―二二一五頁)。

③ (文書番号) 九四四 昭和一三年六月二九日 松嶋通商局長より中村(孝次郎)大蔵省為替局長宛/石沢・ハルト覚書や小谷・ファンモーク覚書の経緯にも鑑み、在日蘭商の地位へ配慮方要請について/通三機密第六七四号/昭和拾参年六月廿九日/外務省通商局長 松嶋鹿夫/大蔵省為替局長 中村孝次郎殿/蘭印向綿布払戻金二関スル(二二一九―二二〇頁)。

なお、国立公文書館のアジア歴史資料センターでは、外務省外交史料館所蔵の文書を電子化して公開するが、小谷の氏名がある文書を多数確認できる。ただし外交史において知られていない存在であり、また原資料の判読が難しかったため、データ

- ペースでは一部において誤記がある。例えば小谷が「肉谷」、淡雲が「漢雲」、「失雲」、「湊雲」、「談雲」、「浜雲」とある。
- (39) 小谷淡雲「爪哇から」(『大乘』第一三卷第六号、一九三四年)、四四頁。
- (40) 前掲、後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』、三二九頁。
- (41) 石居太楼「爪哇邦人草分け物語り(明治時代)」(前掲、武田重三郎編『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡』)、二二三頁。
- (42) アジア歴史資料センター、レファレンス番号 B04011528700、「在外日本人学校教育関係雑件／国民学校教育費補助関係第七卷 5. 昭和八年度在外教育費二関スル件合、四〇号、七、一、十六 (1) バタビヤ管内」所収の「バタビヤ日本人会沿革」(第二〇画像目以降)。
- (43) 前掲、小谷淡雲「爪哇から」、四四～四五頁。引用文中にあるオランダ語文献は、L. H. Goudijs, *Wat wil Japan? de aansluiting van het Verre Oosten*, Den Haag: W.P. van Stockum & Zoon, 1933.
- (44) 無署名「寒さに震ふ」／ジャワから帰国の小谷淡雲副領事」(『中外日報』第一〇九七二号、中外日報社、一九三六年三月二〇日)、二頁。
- (45) バタビヤ日本人会編『会則並に学則並に学則会員名簿―昭和三年八月現在』(爪哇日報社印刷、バタビヤ日本人会発行、一九二八年)、二六頁。アジア歴史資料センター、レファレンス番号 B04011661900、「在外日本人学校教育関係雑件／各学校職員ノ給与調査関係 第一卷 4. 在外日本人学校教員給与ニ関スル件(亜二機密合第一二二二号 昭和四年十一月十六日) 分割3」。
- (46) 前掲、バタビヤ日本人会編『会則並に学則並に学則会員名簿―昭和三年八月現在』、一頁。
- (47) 「バタビヤ日本人会」(小出武夫編『在南洋邦人団体便覧』南洋協会、一九三七年)、三頁。
- (48) ジャカルタジャパンクラブのウェブサイト (<https://jic.or.id/>) での文書「日本人納骨堂春季慰霊祭の案内」(二〇一九年二月一四日掲載、同年三月二一日举行) の案内通知文より。
- (49) 佐藤秋次郎『南方開拓秘譚』(協栄出版社、一九四三年)、二二二～二三四頁。引用文中に「東本願寺」とあるが正しくは「西本願寺」である。
- (50) 小谷淡雲「菩薩行者」(『大乘―ブティストマガジン』第五卷第一〇号、「光瑞上人特集号」、大乘刊行会、一九五四年)、一七頁。
- (51) 小谷淡雲「世田ヶ谷随想」(『大乘』第一七卷第一二号、一九三八年)、三四頁。
- (52) 無署名「遺著 故小谷淡雲氏」(『月刊インドネシア』第二二四号、財団法人日本インドネシア協会、一九六五年)、八頁。

- (53) 前掲、無署名「遺著 故小谷淡雲氏」、八頁。
- (54) 「地名改正ノ件（昭和一七年二月一〇日治政令第一六号）」（ジャワ軍政監部編・発行『治官報』第一号、一九四二年二月）によれば、「第一条「バタビヤ」州ヲ「ジャカルタ州」ニ、「バタビヤ特別市」ヲ「ジャカルタ特別市」ニ、「バタビヤ」県ヲ「ジャカルタ」県ニ改ム」（二頁）とある。
- (55) 「第一章 外務省職員録」（外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年 下巻』原書房、一九六九年）、一五九〇頁。
- (56) 秦郁彦編『南方軍政の機構・幹部軍政官一覽』（南方軍政史研究フォーラム、一九九八年）、一五六頁。
- (57) 財団法人日本心霊科学協会における小谷淡雲の活動は、本論では言及しなかった。近代仏教者と神智学の関係について詳しい吉永進一氏からは、小谷がジャワ島の在勤時にオランダ人から神智学の影響を受けた可能性があるとの指摘を頂いた。小谷とスピリチュアリズムの関係は、今後の課題とする。
- (58) ヴィヴェーカーナンダ研究会編『スワミ・ヴィヴェーカーナンダ―その生涯と語録』（ヴィヴェーカーナンダ生誕百年記念会、一九六三年）にて、小谷淡雲は「ヴィヴェーカーナンダの生涯」、「ヴィヴェーカーナンダ語録」を翻訳した。
- (59) William P. Woodard, *The Allied Occupation of Japan 1945-1952 and Japanese Religions*, Netherlands: Brill, 1972. ウィリアム・P・ウッドワード著、阿部美哉訳『天皇と神道―GHQの宗教政策』（サイマル出版会、一九八八年）。
- 【謝辞】 本論の執筆に際して、小谷淡雲の生家である浄土真宗本願寺派熊本教区益西組正善寺（熊本県宇城市）の川田晃映住職より、貴重な資料閲覧の便宜を賜った。御厚意に記して御礼を申し上げる。

（武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員、文化庁宗務課専門職）